

## 国際会議報告

## 第 9 回 ISO/TC17/SC1 会議

小田 照 己\*

5月24日(月)から28日(金)まで経団連会館901号室で、オーストラリア、オーストリア(西ドイツが代理)、フランス、西ドイツ、日本、イタリア、スウェーデン、イギリス、アメリカの9ヶ国27名の出席者で川村和郎氏(新日鉄基礎研副所長; SC1事務局諮問分科会主査)の議長のもとに第9回ISO/TC17/SC1会議が6年振りに開催された。

ISO/TC17/SC1は鉄鋼の化学分析の国際規格原案を作成する国際組織であり、現在19ヶ国のP-メンバー(原案作成に積極的に参加、審議をおこなう)と8ヶ国のO-メンバー(規格案に対してコメントを述べるだけで投票権はない)により構成されている。

TC17/SC1は1961年イタリアの幹事国のもとで第7回会議まで開催され、1976年第2代幹事国アイルランドのもとに第8回会議が開催されたが、会議後アイルランドの辞任によりSC1活動は停止し、各国のSC1組織は潰滅状態になった。1980年日本が第3代幹事国を引き受け活動を再開した。

SC1作成の規格は鉄鋼の化学分析法であるから、分析技術と実験データにもとづいて審議されるべきであるが、従来のSC1の審議は実験データにもとづいてというよりはむしろ自国の規格を主張することで規格作成がおこなわれてきた。このためSC1は鉄鋼の中で最も基本的な規格を作成し、しかも分析技術の進歩に応じて改訂をしなければならないにもかかわらず、これまでに成立したISO規格はわずかに8件6元素である。更にこれらの多くはすでに技術的には陳腐化しており、大部分の国ではあまり使用されていない。

日本がTC17/SC1幹事国を引き受け、SC1活動を再開するにあたり、

- (1) 過去の審議方法を改め、国際規格原案作成の審議を促進させるため、SC1活動指針を作成する。
- (2) 潰滅状態にある国際組織を再建する。
- (3) 過去のSC1の仕懸り案件をすべて整理進捗させる。
- (4) 上記件の総仕上げとして第9回SC1国際会議を可能な限り早急に開催する。

を目標に日本のSC1事務局諮問分科会は精力的に国内会議を開き、SC1幹事国業務の遂行に協力してきた。

一方川村主査の応援を得て、上記目標達成のため、メ

ンバー国訪問をおこない、第9回SC1国際会議開催の目的を得た。

第9回会議はこのように単に過去の会議の延長線上にあるのではなく、再生SC1の今後の活動方向を決め、会議の成否がメンバー国間の国際協力のもとに規格原案作成を促進するためのルール敷きとなるか否かの性格を有していた。

会議では26議題で、主要案件を記すと

- (1) ISO/TC17/SC1活動指針
- (2) 規格案件
  - 1) 硫黄: 高周波燃焼赤外線吸収法
  - 2) けい素: 吸光光度法
  - 3) クロム: 電位差滴定・目視法
  - 4) ニッケル: 重量・容量法
  - 5) ニッケル: 吸光光度法
  - 6) ニッケル: 原子吸光法
  - 7) 銅: 吸光光度法
  - 8) 銅: 原子吸光法
  - 9) バナジウム: 吸光光度法
  - 10) バナジウム: 電位差滴定・目視法
  - 11) バナジウム: 原子吸光法
  - 12) 遊離炭素: 重量法
- (3) 原子吸光法規格作成の指針
- (4) 将来業務計画

で、これらに対して87件の正式文書が提出され審議がおこなわれた。規格案件の中には1961年以来審議されているものもあり、審議は難航することが予想されたが、全業務についての過去の審議の経過を整理した事務局報告と川村議長の好リードにより論点が整理され、更に日本代表団の用意周到な準備により議事に促進に協力しながら日本の主張を採り入れられるような好タイミングの発言により、友好的な雰囲気の中で会期内に予定議題をすべてこなし、予期した以上の成果を上げることができた。決議事項について簡単にふれると、

- (1) ISO/TC17/SC1活動指針の採択
- (2) 最終規格原案の採択
  - 1) ニッケル: 吸光光度法
  - 2) ニッケル: 原子吸光光度法
  - 3) 銅: 吸光光度法
  - 4) 銅: 原子吸光法
- (3) W・Gの結成

審議促進と分析精度データを得るため国際共同実験をおこなうべく、8のW・Gが結成された。日本は全W・Gに参加し、このうち3のW・Gの主査国となり、SC1内で最大主査引き受け国となった。

これで今後JISがISOに盛り込まれる可能性が非常に多くなった。

\* 日本鉄鋼協会 ISO/TC17/SC1事務局